

飯田女子短期大学卒業生意識調査

—— 短大教育と職業観 ——

田中美智子・小林俊子・大泉伊奈美・尾曾直美・北林ちなみ
矢澤はる美・近藤民恵・中山美香・市瀬 憲・春日 優

A Study on the Attitude of Graduates
in Iida Women's Junior College
—— Junior College Education and
Their View of Occupation ——

Michiko TANAKA, Toshiko KOBAYASHI, Inami OIZUMI, Naomi Oso,
Chinami KITABAYASHI, Harumi YAZAWA, Tamie KONDO,
Mika NAKAYAMA, Ken ICHINOSE and Masaru KASUGA

要旨：平成14年飯田女子短期大学の自己点検委員会は、短期大学基準協会の「認証基準及び評価方法のイメージ」の提示にもとづき、その「評価の視点」で点検・評価を実施した。この結果を受けて平成15年度進路委員会は、本学の教育・生活が卒業後の自己実現にどのように生かされているか質問紙法による「飯田女子短期大学卒業生意識調査」を実施した。その一部は飯田女子短期大学白書 —その現状と課題2004— に「学生の卒後評価への取り組み」として報告した。今回は「短大教育と職業観」に視点を置き、「本学の教育と進路」では卒業生の短大教育と生活の振り返り、現在の生活への影響、「進路と職業に対する考え」では「女性と職業」についての考え方、「職業」についての考え方を進路別・学科別に分析を試みた。さらに、卒業生の本学への要望については、「教育・進路指導の展望」として5つの観点からまとめた。新しい時代の教育の場にふさわしい教育内容の点検はさることながら、進路に関しては、アルバイトとは異なる「働く意識」「専門性への広い認識」について将来を見据えた教育の必要性を感じた。

Key Words：短大教育 (junior college education), 卒業生 (graduates), 職業観 (view of occupation)

1. はじめに

短期大学基準協会は短期大学の第三者評価を実施する認証機関として、平成17年1月文部科学大臣より認証を受けた。

協会は、その評価基準の評価項目の一つとして「学生の卒業後評価への取り組み状況」

をあげているが、今回、進路委員会は、本学を卒業して3～5年経過した卒業生を対象に、質問紙法による調査を実施し、本学の教育・学生生活が現在の仕事にどのように生かされているかを中心に検証することにした。質問紙法に対する回答率は、決して高いと

はいえないが、本学での教育は、現在の仕事に役立っているとする回答が多かった。

宗教教育・行事については、豊かな人生を送るために重視している分野だが、回答者の人生経験が少ないためか、あまり関心がなかったとの回答が多かった。難しい課題であるが、本学の建学の精神が学生に伝わるような工夫が求められる。

本調査の結果報告が、新しい飯田女子短期大学を生み出す一助になれば幸いに思う。

2. 平成10～12年度の就職状況

平成10～12年度の就職状況についてみると、平成10年度は求人件数463件、就職内定率96.3%，平成11年度は502件、97.6%，平成12年度は843件、95.5%であった。表1に3年間の卒業時における就職状況を示す。

氷河期といわれた厳しい就職環境のなかで、本学学生は大変健闘したといえる。しかし、この時期から、卒業後はフリーターを訴

える学生や就職活動に自主性の乏しい学生が目立ち始める。

学生の進路指導に携わる学生部では“就職ガイダンスに参加しない。就職相談に自ら出向くことがない。自ら求人企業・施設を探さない。自ら電話をかける、履歴書を書くことができない”などの学生対応に苦慮しながら就職の内定を維持してきた。しかし、学生が“真に求めている職種及び企業・施設に就職できたのか”“仕事に喜びを感じていけるか”を考えるとまだまだ希望に添えなかった面が多いように思われる。現在も学生部が窓口となって学生の就職支援に携わっているが、多様化する学生の気持ちを支えるには、全教職員の連携した学生への就職支援がなによりも大切であると考えている。

3. 調査目的と方法

1) 調査目的

本調査の目的は、本学での教育が卒業生の

表1 卒業時の職種

									(人)
年 度	学科・専攻・ コース 職種	生活デザイン	健康生活☆	食物	幼児教育	社会福祉☆☆	看護	計	
平成10年度 n=270	専門職	0.7	6.6	9.6	12.6	4.4	14.1	48.1	(130)
	一般職	1.5	15.2	6.7	6.3	5.5	0.0	35.2	(95)
	進 学	0.4	1.5	1.1	0.7	0.4	7.4	11.5	(31)
	その他	0.0	1.5	1.5	1.9	0.4	0.0	5.2	(14)
	計	2.6	24.8	18.9	21.5	10.7	21.5	100.0	(270)
平成11年度 n=226	専門職	1.8	4.9	10.2	13.7	6.6	18.6	55.8	(126)
	一般職	4.4	7.1	5.3	9.3	2.7	0.0	28.8	(65)
	進 学	0.4	2.2	0.4	0.0	2.2	6.2	11.5	(26)
	その他	0.4	0.9	0.9	0.9	0.9	0.0	4.0	(9)
	計	7.1	15.0	16.8	23.9	12.4	24.8	100.0	(226)
平成12年度 n=263	専門職	2.3	6.8	9.1	9.1	7.6	15.2	50.2	(132)
	一般職	4.2	6.8	2.3	6.9	4.6	0.0	24.7	(65)
	進 学	0.4	3.5	0.4	1.5	4.9	5.3	16.0	(42)
	その他	1.5	1.1	0.4	1.1	2.3	2.7	9.1	(24)
	計	8.4	18.2	12.2	18.6	19.4	23.2	100.0	(263)

☆現在の保健養護コース ☆☆現在の福祉心理コース

表2 調査対象者数と回収率

		人 (%)	
学科コース		配布数	回収数
家政学科家政専攻	生活デザインコース	44	4 (0.5)
家政学科家政専攻	健康生活コース	143	26 (3.5)
家政学科食物専攻		120	18 (2.4)
幼児教育学科	幼児教育コース	158	25 (3.4)
幼児教育学科	社会福祉コース	108	17 (2.3)
看護学科		163	32 (4.4)
合 計		736	122 (16.6)

意識や行動にどのように影響しているかを分析し、今後の教育のあり方を探ることである。

2) 調査方法

- ① 調査時期：平成15年1月。
- ② 調査対象：平成10～12年度卒業生736名。（職場にも慣れ、仕事の上でも自分の考えが反映され、且つ、短大教育・生活が記憶に新しい年代とした。）
- ③ 調査方法：郵送による質問紙法。
- ④ 調査内容：
 - (1)本学で過ごした学生生活の振り返り
 - (2)本学を卒業したことについての印象とその理由
 - (3)現在の生活に影響をおよぼした短大教育と学生生活
 - (4)転職希望の状況
 - (5)女性と職業に対する考え方
 - (6)職業に対する考え方
 - (7)本学への要望。
- ⑤ 回収率：16.6%（122名）。（表2）

4. 変数説明と分析方法

1) 変数説明

分析要因として「職業」「本学の教育」「職業観」の3つをあげ、それぞれの関連について分析した。各要因を構成する変数は下記の通りである。

(1) 職業

「職業」を構成する変数は「卒業時の進路」と「調査時の職業」の2変数である。卒業時

の進路は「就職」「専攻科進学」「4年制大学進学・編入」「専門学校進学」「家居」「その他」の6件法で回答を求めた。「就職」については、具体的に職種の記述を求めた。

分析にあたっては「専門（本学で取得した資格や知識・技能を生かした職業への就職）」「一般（特に専門性を意識しない一般的な職業への就職）」「進学（専攻科、4年制大学、専門学校への進学）」「その他」の4件法に分類し直した。

(2) 本学での教育

「本学での教育」を構成する変数は「本学を卒業したことについての印象」「本学の印象に対する理由」「本学で過ごした学生生活の振り返り」「現在の生活に影響をおよぼした短大教育と学校生活」の4変数である。

「本学を卒業したことについての印象」は、本学を卒業したことについてどのように思うか「非常によかったと思う」「よかったと思う」「どちらともいえない」「あまりよくなかったと思う」「よくなかったと思う」の5段階で回答を求めた。分析にあたっては「非常によかったと思う」と「よかったと思う」を合わせ、「あまりよくなかったと思う」と「よくなかったと思う」を合わせて3段階に調整した。

「本学の印象に対する理由」は「専門的技術が身についたこと」「社会的に認められた資格や単位が得られたこと」「広い意味での

教養・知識が身についたこと」「大学生活でいろいろな人に交わり、経験を広めたこと」「就職に有利だったこと」「専門的技術が身につかなかったこと」「社会的に認められた資格や単位が得られなかったこと」「教養や知識が十分身につかなかったこと」「いろいろな人と交われなかったこと」「就職にあまり有利でなかったこと」と「その他」を含む11の選択肢をあげ、該当するものを1つ選んでもらった。

「本学で過ごした学生生活の振り返り」は「講義・授業」「宗教教育（A・H，行事）」「教師との個人的接触」「学内での友だちとの交わり」「クラブ活動」「寮生活」「アパート生活」の7つの項目について、学生生活を振り返り、どのように思うか、「非常に有意義だった」「いくらか有意義だった」「どちらともいえない」「あまり有意義でなかった」「有意義でなかった」の5段階で回答を求めた。分析にあたっては「非常に有意義だった」と「いくらか有意義だった」を合わせ、「あまり有意義でなかった」と「有意義でなかった」を合わせて、3段階に調整した。また「クラブ活動」「寮生活」「アパート生活」については、該当者が限られるため分析から除いた。

「現在の生活に影響をおよぼした短大教育と学生生活」は、本学で受けた教育や学生生活の影響について「専門的知識・技術」「ものの考え方や判断力」「社会の問題についての理解力や関心」の3項目にどのくらいの影響を受けたか、「非常に受けた」「いくらか受けた」「どちらともいえない」「あまり受けなかった」「ほとんど受けなかった」の5段階で回答を求めた。分析にあたっては「非常に受けた」「いくらか受けた」を合わせ、「あまり受けなかった」と「ほとんど受けなかった」を合わせて3段階に調整した。

(3) 職業観

「職業観」を構成する変数は「現職の継続意識」「女性と職業についての考え」「職業に

対する考え」の3変数である。

「現職の継続意識」は、今後の職業についてどのように考えているか、「現在の仕事を続けたい」「現在の仕事を变えたい」「現在の仕事をやめたい」「現在職業をもっていないし、職業につきたいとは思わない」「現在職業をもっていないが、職業につきたい」の5件法で回答を求めた。

「女性と職業についての考え」は、「結婚するまでは職業をもつ」「子どもができるまでは職業をもつ」「子どもができたら職業をやめ、手がかからなくなったら職業をもつ」「結婚・出産・子育てなどに関係なく、ずっと職業をもつ」「女性は職業をもつ必要はない」「わからない」の6つの選択肢を挙げ、自身の考えに近いものを1つ選んでもらった。

「職業に対する考え」は、「女性にも男性と同じように仕事をする能力がある」「上司はやはり男性がいい」「仕事をする以上は昇進したい」「むずかしい仕事にも積極的に取り組みたい」「管理職や責任の重い仕事に魅力を感じる」「仕事に就いても夫より早く帰宅するのが好ましい」「女性も経済的に自立すべきである」の7つの意見についてどのように思うか、「その通りだと思う」と「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「全くそうは思わない」「考えたことがない」の5段階で回答を求めた。分析にあたっては「その通りだと思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせ「肯定的群」とし、「どちらかといえばそう思わない」と「全くそうは思わない」を合わせ「否定的群」として3段階に調整した。

2) 分析方法

本学での教育が、卒業生の意識や行動にどのように影響しているかについては「職業」「本学での教育」「職業観」の3要因の中から2要因ずつ組み合わせたクロス集計をもと

表3 本学を卒業したことについてどのように思うか

(%)

項 目	n	よかった	どちらとも いえない	よくなかった
専門的技術が身についたこと	20	16.8	15.4	0.0
社会的に認められた資格や単位が得られたこと	34	29.0	23.1	0.0
広い意味での教養・知識が身についたこと	26	24.3	0.0	0.0
大学生活でいろいろな人に交わり、経験を広めたこと	25	21.5	7.7	50.0
就職に有利だったこと	1	0.9	0.0	0.0
専門的技術が身につかなかったこと	3	0.0	23.1	0.0
社会的に認められた資格や単位が得られなかったこと	0	0.0	0.0	0.0
教養や知識が十分身につかなかったこと	2	0.0	15.4	0.0
いろいろな人と交われなかったこと	0	0.0	0.0	0.0
就職にあまり有利でなかったこと	1	0.0	0.0	50.0
複数回答	8	6.5	7.7	0.0
不明・無回答	2	0.9	7.7	0.0
合 計	122	100.0	100.0	100.0

に相互の関連性を分析した。本学での教育や進路指導への要望については、クロス集計の分析と質問紙法調査での自由記述、「本学の授業に対してもっと学んでおいた方がよかったと思われること」と「短大に対しての要望」を合わせて考察を行った。

データの集計・分析にはSPSSを用いた。

5. 結果および考察

1) 本学の教育と進路

(1) 本学を卒業したことについての印象とその理由

結果を表3に示す。本学を卒業したことについての印象が「よかった」と回答したものは、「社会的に認められた資格や単位が得られたこと」が29.0%と最も高く、「広い意味での教養・知識が身に付いたこと」24.3%、「大学生活でいろいろな人に交わり、経験を広めたこと」21.5%、「専門的技術が身についたこと」が16.8%と続いた。

今回の調査では、「就職に有利だった」と回答したものは1名であったが、本学の卒業後の進路において表1で示したように就職率

の高さを考えると、質問構成が複数回答でなく、最もあてはまる項目を一つに限定したためにあらわれた結果と考える。「よくなかった」と回答したものは2名で、その理由としては、「就職にあまり有利でなかったこと」「大学生活でいろいろな人に交わり、経験を広めたこと」が各1名であった。後者については、「よくなかった」理由としてあげるには不適切であるが、これは、該当する回答の選択肢が次ページにわたっていることからこのような回答になったと推察する。

(2) 本学で過ごした学生生活の振り返り

本学を卒業したことについて、「非常によかったと思う」「よかったと思う」と回答したものが、本学で過ごした学生生活を振り返ってどのように思っているかを図1に示す。

「非常に有意義だった」と回答したものの割合が最も高かったのは、「学内での友だちとの交わり」が57.0%と半数を超えている。続いて「教師との個人的接触」が31.7%、「講義・授業」が26.2%を占めており、「宗教教育(A・H, 行事)」は4.7%とわずかであった。

一方、「非常に有意義だった」と「いくらか有意義だった」と回答したものを合わせた割合は、「講義・授業」89.8%と非常に高く、以下「学内での友だちとの交わり」87.8%、「教師との個人的接触」70.3%、「宗教教育（A・H，行事）」30.9%であった。「あまり有意義でなかった・有意義でなかった」と回答したものは、「宗教教育（A・H，行事）」が31.8%と最も高く、「教師との個人的接触」29.7%、そして「学内での友だちとの交わり」「講義・授業」は12.2%，10.3%，とともに低かった。

「講義・授業」「教師との個人的接触」において、「非常に有意義だった」「いくらか有意義だった」が高値であった理由として、本学の教育が卒業後も「有意義だった」と思う学生を育成する環境であったと推察する。これは専門的知識の習得や資格取得の教育を行っていることも一つの要因であろう。また、「学内での友だちとの交わり」や「教師との個人的接触」といった人との出会いについて、「有意義だった」と思う卒業生が多かったことは、人と関わる職に就く社会人を多く養成している本学が評価されていることであると推察できる。このことは、本学の建学の精神である「美しく生きる」ことを具現化するための方向性として、「他者を認めあうこころ

を養い〈聞く〉〈問う〉〈語る〉の基本を学ぶ」教育の効果と考えられる。一方、「宗教教育（A・H，行事）」の評価は低かった。この質問での宗教教育は、質問形式から A・Hと行事に代表される宗教教育を示すものと受けとめられ、全学生が履修する宗教の授業や看護学科の仏教看護のあり方を含む本学で行われている宗教教育全般の評価ではないと解釈したい。しかし、少なくとも A・Hや宗教関連の行事については学生の評価が高くなるように今後のあり方を検討する必要がある。

(3) 現在の生活に影響を及ぼした短大教育と学生生活

影響を受けた項目別に“本学で過ごした学生生活を振り返って思うこと”との関係を図2-1～図2-3に示す。「専門的知識・技術」「ものの考え方や判断力」「社会問題について」の3項目において、「講義・授業」，「学内での友だちとの交わり」で「有意義だった」と回答したものが92.5～90.9%と高く、「教師との個人的接触」は71.8～67.0%であった。「教師との個人的接触」が「講義・授業」と「学内での友だちとの交わり」より有意義だったと回答したものが少なかったことは、一般的に高等教育機関では予想されることである。しかし、70%前後と比較的多くの卒業生

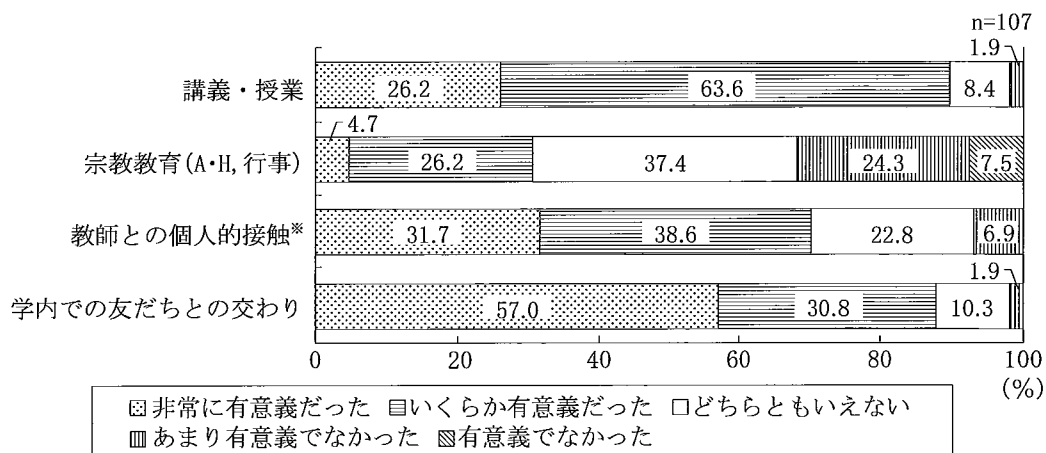


図1 本学で過ごした学生生活の振り返り

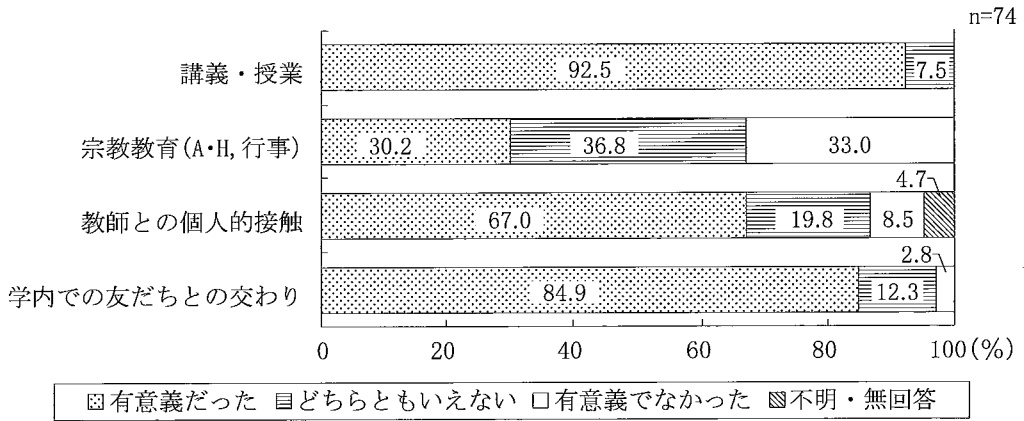


図2-1 現在の生活に影響を及ぼした短大教育と学生生活
(専門的知識・技術)

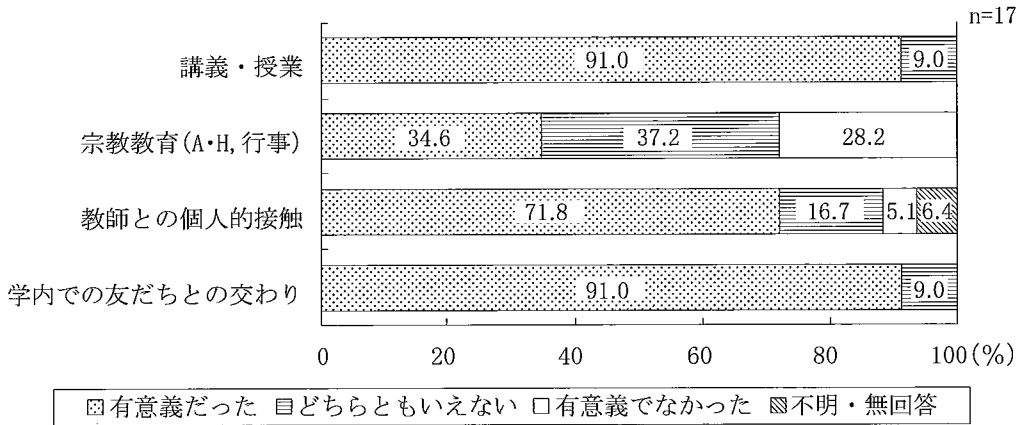


図2-2 現在の生活に影響を及ぼした短大教育と学生生活
(ものの考え方や判断力)

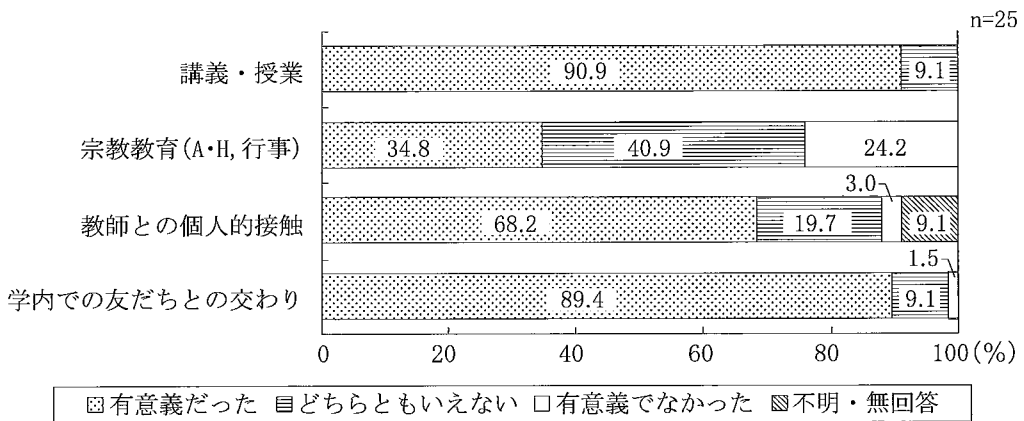


図2-3 現在の生活に影響を及ぼした短大教育と学生生活
(社会の問題について)

が「有意義だった」と回答しているということは、アドバイザーをはじめ多くの教職員が学生の生活をサポートする体制が評価されていると推察できる。また、本学の多くの学科の特徴として、資格取得の為の学外実習がある。これらの実習を行うことにより、学内での友だちとの交わり・教員との関係・他施設とのかかわりを通して「専門的知識・技術」「ものの考え方や判断力」「社会問題について」影響を与える何かが生じているのかもしれない。

「宗教教育（A・H，行事）」においては、「有意義でなかった」と回答したものが33.0～24.2%あった。これについては宗教に関する授業などを含めたらもう少しプラスの影響が見られたかもしれない。

（4）進路別にみた短大教育と学生生活

卒業時の進路別に短大教育と学生生活をみた結果を図3-1～図3-3に示す。専門職者・進学者の回答は「講義・授業」において、「非常に有意義だった」「いくらか有意義だった」と回答したものが88.0%，82.4%と高い割合を占めていたが、一般職者に限り「非常に有意義だった」が5.9%と他と比べて顕著に低かった。これは、専門職者・進学者においては、本学の教育で得たことが進路に影響しており、達成感を得ることができたためと考える。さらに、自己充実・実現にも繋がっていくことと考えられる。一般職者は、専門職を希望しても雇用がない場合と、専門職を希望せず一般職につくものがある。専門的知識を得たとしても、少なからずそれを活かす環境ではないため、一般職者に限り「非常に有意義だった」が低い結果となったと考える。本学のほとんどの学科が専門職に就くものを養成しているため、専門的な授業は充実している。しかし、今回の調査では一般職の評価が低かった。今後は学生が本学に何を望んでいるかを把握し、一般職を念頭に置いた講義や授業を充実させることが課題であるといえよう。

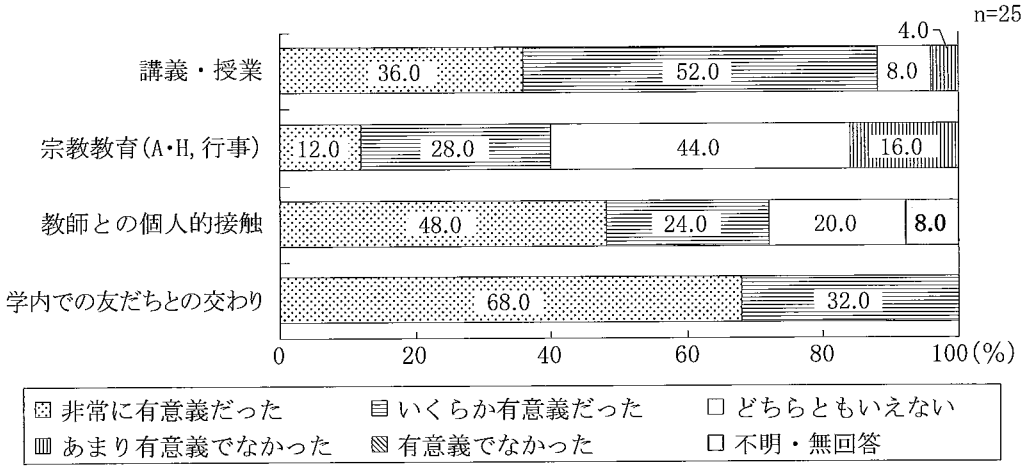
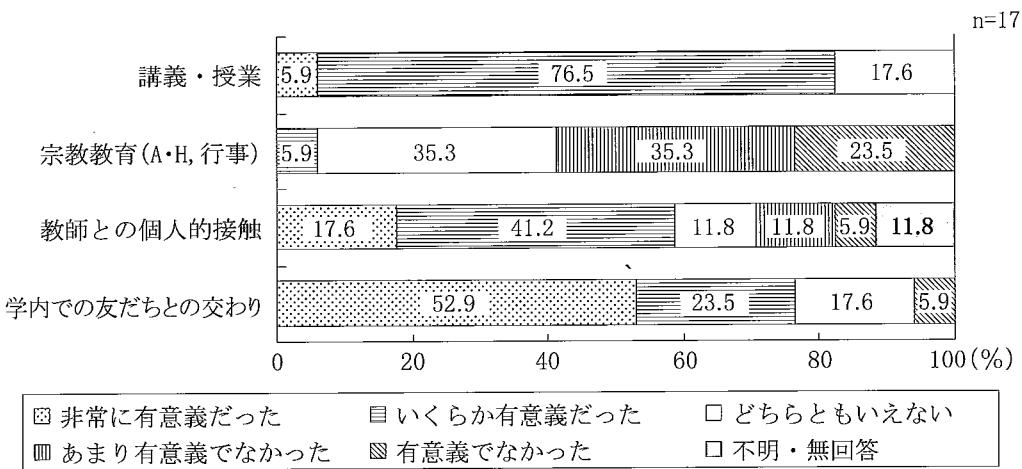
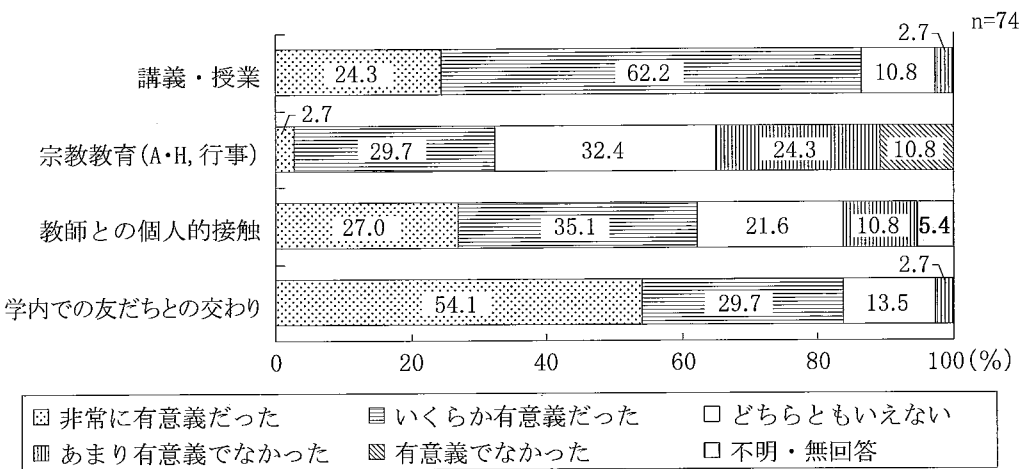
「学内での友だちとの交わり」においては、専門職者、一般職者、進学者のすべてにおいて「非常に有意義だった」「いくらか有意義だった」と回答したものが100～76.4%であった。「教師との個人的接触」においては、「非常に有意義だった」「いくらか有意義だった」と回答したものが72.2～58.8%と半数以上を占めている。なかでも進学した学生の48.0%が「非常に有意義だった」と回答していた。「宗教教育（A・H，行事）」においては、他の項目に比べて「非常に有意義だった」「いくらか有意義だった」と回答したものが少なく、特に一般職では、「非常に有意義だった」と回答したものがみられなかった。

「宗教教育（A・H，行事）」においては、前述のとおり「本学で過ごした学生生活の振り返り」「現在の生活に影響を及ぼした短大教育と学生生活」「進路別にみた短大教育と学生生活」の3つの分析において、いずれも「有意義でなかった」と回答したものの割合が高かった。このことから、A・Hや宗教行事が本学の教育にとって意義あるものとして再構築していく必要があると考える。

（5）進路別にみた本学で受けた教育や学生生活の影響

進路別に本学で受けた教育や学生生活が、卒業生の現在（調査時）の生活にどのような影響を与えているかを図4-1～図4-3に示す。専門職者・進学者は「専門的知識・技術」において、「非常に受けた」「いくらか受けた」と回答したものが87.9%，84.0%と高い割合を占めていた。一般職者は、「非常に受けた」「いくらか受けた」は88.2%と高いが、「非常に受けた」が17.6%と他と比べて顕著に低かった。

「ものの考え方や判断力」においては、専門職と一般職は60.8%，58.8%であったが、進学者は72.0%と他と比べて高かった。なかでも進学者は、「非常に受けた」と回答したものが専門職と一般職に比べてほぼ倍の割合



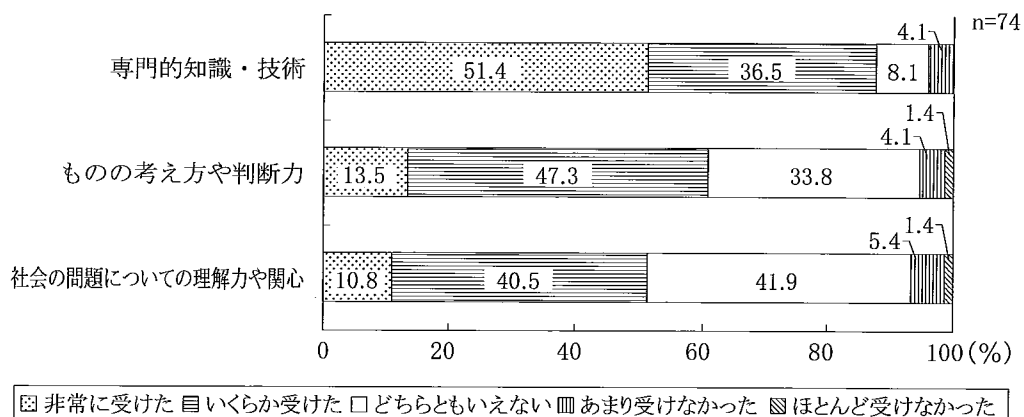


図4-1 進路別にみた本学で受けた教育や学生生活の影響（専門職）

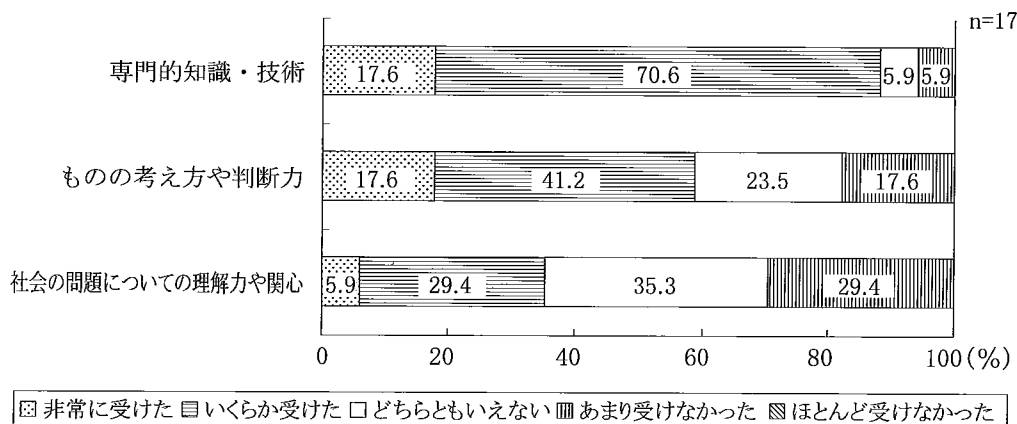


図4-2 進路別にみた本学で受けた教育や学生生活の影響（一般職）

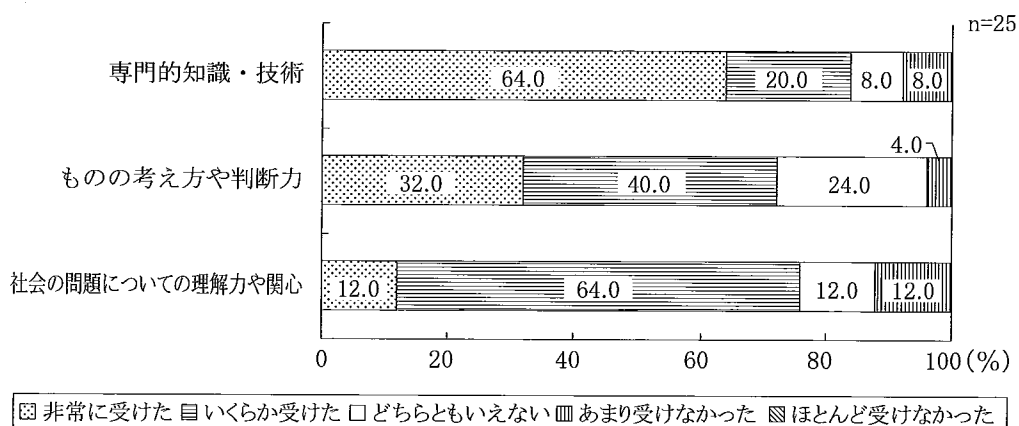


図4-3 進路別にみた本学で受けた教育や学生生活の影響（進学）

を占めていた。

「社会の問題についての理解力や関心」においては、「いくらか受けた」とした進学者は64.0%、専門職者は40.5%であったが、一般職者は、「非常に受けた」「いくらか受けた」と回答したものを合わせても35.3%と低かった。

この結果についても一般職者への影響力は小さく、専門職と進学者への影響力は大きかった。特に「専門的知識・技術」に対する一般職での「非常に受けた」という回答者が少なかったのは、一般企業へ就職する学生への指導があまり充実していないのではないかと推察する。専門職に就く学生だけでなく、一般企業へ就職する学生への指導も充実させる必要性を強く感じた。

以上、本学の教育と進路との関連について、その特徴をまとめると、宗教教育の評価の低さと一般職へ就いた卒業生の評価の低さがあげられる。これらのことから、今後、学生の意向も組み入れながらA・Hや宗教関連の行事のあり方と、一般企業へ就職する学生への指導体制を検討することが早急の課題としてあげられよう。

2) 進路と職業に対する考え

(1) 卒業後の定職率と変動

卒業生の進路を専門職・一般職・進学・その他の4つに類別し、「卒業時の進路」と「現在の職業」の関係を表4に示す。

本学に入学する大多数は、将来の職業を十分意識し、毎年約98%のものが免許・資格を取得し卒業していく。

表4に示された通り、卒業時の専門職への就職が61.1%と高く、進学20.6%、一般職14.1%と専門職との差は大きい。進学の高まりは、本学に専攻科が創設されたことに起因するところでもある。また、卒業時からの職業変動は、卒業時から現在まで専門職に就いているものが52.1%、卒業時の一般職14.1%はその後、専門職に1.7%、一般職に8.3%の

表4 卒業後の定職率と変動

(%)

卒業時の職業	現在の職業				
	専門職	一般職	学 生	その他	計
専門職	52.1	0.8	0.8	7.4	61.2
一般職	1.7	8.3	0.0	4.1	14.0
進 学	15.7	3.3	0.8	0.8	20.7
その他	4.1	0.0	0.0	0.0	4.1

n=121 (卒業時・現在ともに無回答の1名を除く)

ものが従事している。また卒業時に進学した20.6%の内15.7%が専門職に就いている。このことから、本学卒業生は卒業後に至っても専門職への希望を持ち続けていると推察できる。

進展していく時代のなかで、卒業生の現場復帰に短大はどのような支援ができるだろうか。今後、在学生の教育と合わせて社会的に対応すべき教育・研究を系統的に広く提供していかななくてはならないと考える。

(2) 転職希望の状況

毎年4月にまとめられる本学の卒業生就職率は100%の状況にある。卒業後の転職の有無について回答を求め、卒業時の職種別に、現在の転職の意向をまとめたものが表5である。「現在の職業を続けたい」とするものは68.8%中、専門職59.8%、一般職8.2%みられる。その原因については回答を求めなかったが、「現在の仕事を変えたい、やめたい」と考えているものが16.4%いる。

その内訳は、専門職者に9.0%、一般職者に4.1%であった。平成13年職安調査では、新卒者の離職率が3ヶ月、6ヶ月、1年において報告されている。そして就職意識として、アルバイトと就職との違いや入社先の調査・理解のもとに慎重な就職先の決定がなされるように指導が求められている。

本調査の卒業2～3年間においては、「現在の仕事を変えたい、やめたい」という思いをもちながらも、卒業時に就職した職場で頑

表5 転職希望の状況

(%)

項 目	専門職	一般職	学 生	その他	無回答	計
現在の仕事を続けたい	59.8	8.2	0.0	0.8	0.0	68.9
現在の仕事を变えたい	9.0	4.1	0.8	0.0	0.0	13.9
現在の仕事を辞めたい	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5
現在職業を持っていないし、 職業に就きたいとは思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
現在職業を持っていないが、職業に就きたい	0.0	0.0	0.0	9.8	0.0	9.8
無回答	1.6	0.0	0.8	1.6	0.8	4.9

n = 122

張っているといえる。その傾向は一般職者よりも専門職者に多くみられる。質問紙では、その原因を問わなかったが、専門職については、短大が相談のよりどころとなり得ることはできないかと考える。

(3) 女性と職業についての考え方

本学の卒業生は、女性が職業を持つことをどのように考えているのだろうか。質問紙の中から、自分の「女性と職業」に対する考えに一番近い事項を選択してもらった。その結果を図5に示す。その第1は、「子どもができれば職業を辞め、手がかからなくなったらまた職業をもつ」とするものが45.1%、「結婚・出産・子育てに関係なく、ずっと職業をもつ」ことを望んでいる人も約3分の1いることがわかった。

これは高度の教育と専門知識・技能の修得を通じて、社会の向上発展に寄与する女性の育成を目的としている本学教育の影響による

ものと考えられる。「子どもができるまで職業をもつ」「子どもに手がかからなくなったら、また職業をもつ」と考えている人が約半数いることは、手のかかるうちは子どもと共にいて母親として、子育てに専念したいとする考え方の現れであろうか。「女性は職業をもつ必要はない」と考えるものはいなかった。本学に入学してくる学生は専門職に就くことを目指しているものが多いため、女性であっても職業をもつことを当然のように考えていると思われる。

①学科別にみた「女性と職業」についての考え方

表6に示すように、学科によって就職した職種に違いがあり、それに伴う考え方の違いが現れた。食物栄養専攻と福祉心理コースでは「子供ができれば職を辞め、手がかからなくなったらまた職をもつ」という考えが「結婚・出産・子育てなどに関係なく、ずっと職

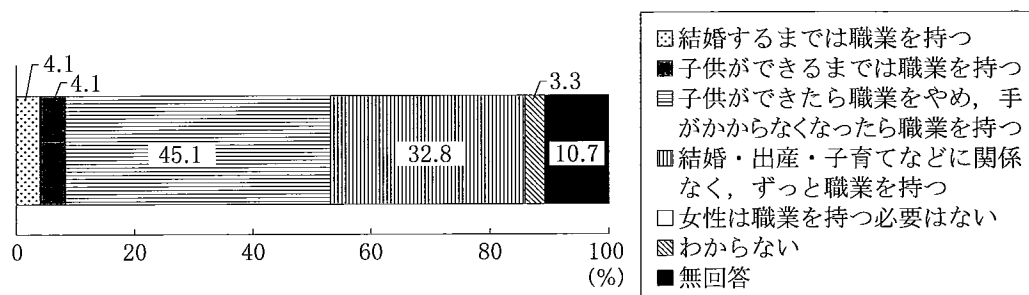


図5 女性と職業に対する意識

表6 学科別の職業についての考え方
(%)

	子供ができた 職を辞め、手 がかからな くならもつ	結婚・出産・ 子育てなど に関係なく、 ずっと職をもつ
生活デザイン	25.0	50.0
健康生活☆	38.5	34.6
生活福祉	0.0	0.0
食物栄養	55.6	16.7
幼児教育	44.0	36.0
社会福祉☆☆	52.9	23.5
看護	43.8	40.6

☆現在の保健養護

n=122

☆☆現在の福祉心理

をもつ」ことより、高い値になっている。生活デザイン専攻を除くそれ以外では、両者の間で大きな違いは見られなかった。これは、自分の家庭の状況に合わせて働くことができるか、また再就職が難しい職種においても左右されると考える。幼児教育コースでは、子どもにとって母親の存在、保育所・幼稚園に預けることの意味、保育職の仕事の重要性など、よく理解されている結果の現われとも考えられる。

②「短大教育・生活」と「女性と職業」の考え方

短大教育や学生生活を振り返り、現在の生活にどのような影響を受けたか「女性と職業の考え方」との関係をみたものが表7-1～表7-3である。

短大教育・生活の影響については、「専門的知識・技術」では「非常に受けた」49.2%、「ものの考え方・判断力」では46.7%、「社会の問題についての理解や関心」では43.5%が「いくらか受けた」と回答していた。そして、何れも「女性の職業」に対する考えは、「子どもができたら職業を辞め、手がかからなくなったら職業をもつ」「結婚・出産・子育て

などに関係なく、ずっと職をもつ」とする二つの考えに代表される。しかし、この結果を簡単に短大教育、生活の影響と断定することはできないが、「専門的知識・技術」の影響を非常に受けたとするものが、専門職に就いている人ほど多く回答していることを知るとき、女性にとって働きやすい制度的条件は整えられてきた現代ではあるが、個人サイドでの職場や家庭環境は、まだまだ女性にとって、子どもの誕生は結婚すること以上に職業の選択が求められ、仕事を続けることの難しさを感じられる。しかし、「子どもの手がかからなくなったら仕事をもつ」という考えは、一見共感しやすいが、「手がかからない」ということをどのように解釈したらよいのだろうか。また「仕事をもつ」ということは、再復帰を意味した思いなのだろうか。ここではその回答は得られなかったが、女性の職業観が短大教育・生活の影響とはいえないとしても、多くの学生が資格を取得し、専門職への思いを高め、卒業後においても資格職に就くことに希望をつなげていきたいことを知った。しかし、「子どもの手がかからなくなったら職を持つ」とする考えについて、どのように受けとめたらよいのだろうか。短大での資格が、そのまま一生有効であるかのように解釈されてはいないだろうか。理由はともあれ、現場から離れたブランクの年月は、どのように考えるのだろうか。働く人の40%が女性で占められる現在、どのような仕事にしても「いい仕事をしたい」という意識をきちんと持てほしい。しかし、ここには女性の安易な職業観が感じられてならない。

(4) 職業についての考え方

図6に示す7項目について、どのような考えを持っているかについて「その通りだと思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「全くそう思わない」「考えたことがない」の5段階で回答を求めた。

表7-1 短大教育・生活と「女性と職業」の考え方

(専門的知識・技術)

(%)

「女性と職業」の考え方	短大教育・生活	非常に 受けた	いくらか 受けた	どちらとも いえない	あまり 受けなかった	ほとんど 受けなかった
結婚するまでは職業をもつ		1.6	1.6	0.0	0.8	0.0
子供ができるまでは職業をもつ		0.8	1.6	0.8	0.8	0.0
子供ができたら職業を辞め、手がかからなくなったら職業をもつ		23.8	17.2	2.5	1.6	0.0
結婚・出産・子育てなどに関係なく、ずっと職をもつ		19.7	9.8	3.3	0.0	0.0
女性は職をもつ必要はない		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
わからない		0.8	0.8	0.8	0.8	0.0
無回答・複数回答		2.5	6.6	0.8	0.8	0.0
計		49.2	37.7	8.2	4.9	0.0

n = 122

表7-2 短大教育・生活と「女性と職業」の考え方

(ものの考え方や判断力)

(%)

「女性と職業」の考え方	短大教育・生活	非常に 受けた	いくらか 受けた	どちらとも いえない	あまり 受けなかった	ほとんど 受けなかった
結婚するまでは職業をもつ		0.0	3.3	0.8	0.0	0.0
子供ができるまでは職業をもつ		0.0	1.6	1.6	0.8	0.0
子供ができたら職業を辞め、手がかからなくなったら職業をもつ		7.4	19.7	13.1	4.9	0.0
結婚・出産・子育てなどに関係なく、ずっと職をもつ		8.2	16.4	8.2	0.0	0.0
女性は職をもつ必要はない		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
わからない		0.8	0.0	1.6	0.0	0.8
無回答・複数回答		0.8	5.7	4.1	0.0	0.0
計		17.2	46.7	29.5	5.7	0.8

n = 122

表7-3 短大教育・生活と「女性と職業」の考え方

(社会の問題についての理解力や関心)

(%)

「女性と職業」の考え方	短大教育・生活	非常に 受けた	いくらか 受けた	どちらとも いえない	あまり 受けなかった	ほとんど 受けなかった
結婚するまでは職業をもつ		0.0	3.3	0.8	0.0	0.0
子供ができるまでは職業をもつ		0.0	1.6	1.6	0.8	0.0
子供ができたら職業を辞め、手がかからなくなったら職業をもつ		5.7	14.8	16.4	8.2	0.0
結婚・出産・子育てなどに関係なく、ずっと職をもつ		4.1	17.2	9.8	1.6	0.0
女性は職をもつ必要はない		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
わからない		0.0	2.5	0.0	0.0	0.8
無回答・複数回答		0.8	4.1	5.7	0.0	0.0
計		10.7	43.4	34.4	10.7	0.8

n = 122

その結果、「女性にも男性と同じように仕事をする能力がある」の問いには、「その通り」と「どちらかといえばそう思う」とする回答が82%みられた。これは専門職に限らず、どのような仕事においても働く喜びが自信に繋がるものと受けとめる。そして、その自信は資格を持って働くことが大きく影響していると考えられる。「上司は異性がのぞましい」とする考えに対して、「上司は男性がよいと思わない」ものが65%近くいる。本学の免許・資格を生かした介護福祉士・養護教諭・栄養士・訪問介護員・保育士・幼稚園教諭・看護師の職場の多くは女性の職場といえる。そのため必然的に上司も女性が多いことを考えると、男性がいいとする考えには、観念的な女性の上司に対する批判の現われとして受け止められる。さらに「仕事をする以上は昇進したい」と考えているものは51.6%みられ、「難しい仕事にも積極的に取り組みたい」が63.9%みられる。しかし、「管理職や責任の重い仕事に魅力を感じる」ものは22.0%である。仕事は続けても社会的立場として責任を負うことを避ける傾向が伺われる。働くことに悩み、いい仕事をしたいという喜びからは少し離れて受けとめられているように思う。つまり、「仕事はしていても家庭を持った時

は、夫より早く帰宅する」ことが望ましいと思っているものは48.3%おり、仕事と同様に家庭も大切に考えていることがわかる。「女性も経済的に自立すべきである」と思っているものは76.2%と高く、本学には専門職取得を目指して入学してくるため、女性の自立意識は高いといえる。しかし今日の労働意識は、誰でもが働くことが当たり前、続けることも当たりの考えもある。本学での専門者としての力量形成は、女性の自立、生き方に対しての意識も同時に高めていける機会でもある。女性であるがゆえに、生涯の生き方を考えるよい学習の場になり得ないものだろうか。

仕事に関する能力・昇進・管理職・家庭・経済についての考えを4分類し、本学で受けた教育・学生生活の影響との関係を表8-1～表8-5に示す。

①女性と男性の能力差(表8-1)

「専門的知識・技術」について「影響を受けた」ものは、能力的には男女での仕事上の能力に差異は無いと考えているものが72.0%を超える。このことは、専門職に就いての自信にもつながると見ることができる。また、就学期間中の専門的分野における教育の充実度が反映しているとも見ることができる。し

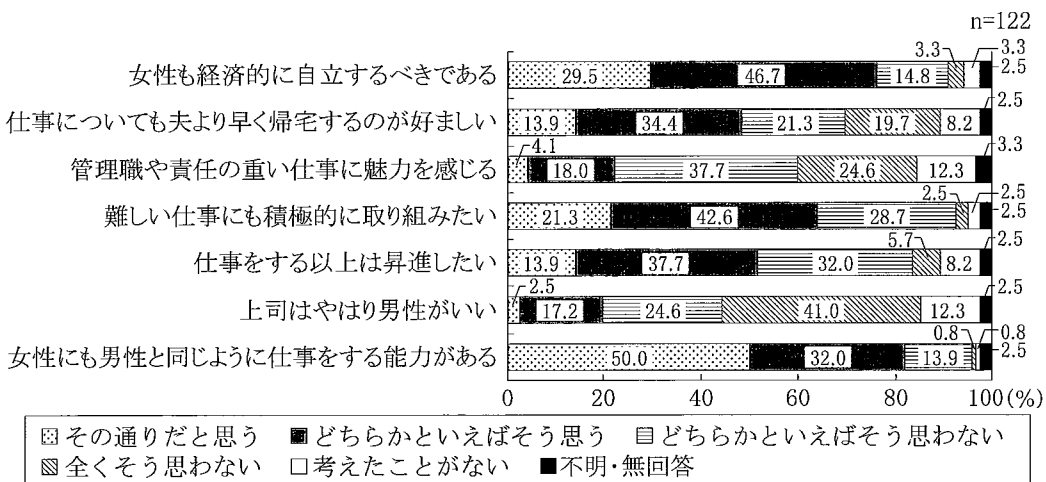


図6 職業への意識

表8-1 女性にも男性と同じように仕事をする能力がある

%(人)

影響	考え方	肯定的群	否定的群	考えたことがない	不明・無回答	合 計
専門知識・技術	受 け た	72.1	11.5	0.8	2.5	86.9(106)
	どちらともいえない	6.4	0.8	0.0	0.0	8.2 (10)
	受けなかった	2.5	2.5	0.0	0.0	4.9 (6)
	計	82.0	14.7	0.8	2.5	100(122)
ものの考え方や 判断力	受 け た	50.0	10.6	0.8	2.5	63.9 (78)
	どちらともいえない	26.2	3.3	0.0	0.0	29.5 (36)
	受けなかった	5.7	0.8	0.0	0.0	6.6 (8)
	計	82.0	14.7	0.8	2.5	100(122)
社会の問題に ついての 理解力や関心	受 け た	44.5	6.4	0.8	1.6	54.1 (66)
	どちらともいえない	27.0	6.6	0.0	0.8	34.4 (42)
	受けなかった	10.6	0.8	0.0	0.0	11.5 (14)
	計	82.0	14.7	0.8	2.5	100(122)

表8-2 仕事をする以上は昇進したい

%(人)

影響	考え方	肯定的群	否定的群	考えたことがない	不明・無回答	合 計
専門知識・技術	受 け た	45.9	32.0	6.6	2.5	86.9(106)
	どちらともいえない	4.1	4.1	0.0	0.0	8.2 (10)
	受けなかった	1.6	1.6	1.6	0.0	4.9 (6)
	計	51.6	37.7	8.2	2.5	100(122)
ものの考え方や 判断力	受 け た	34.4	22.9	4.1	2.5	63.9 (78)
	どちらともいえない	14.7	12.3	2.5	0.0	29.5 (36)
	受けなかった	2.5	2.5	1.6	0.0	6.6 (8)
	計	51.6	37.7	8.2	2.5	100(122)
社会の問題に ついての 理解力や関心	受 け た	32.8	16.4	3.3	1.6	54.1 (66)
	どちらともいえない	11.4	18.8	3.3	0.8	34.4 (42)
	受けなかった	7.4	2.5	1.6	0.0	11.5 (14)
	計	51.6	37.7	8.2	2.5	100(122)

表8-3 管理職や責任の重い仕事に魅力を感じる

%(人)

影響	考え方	肯定的群	否定的群	考えたことがない	不明・無回答	合 計
専門知識・技術	受 け た	20.5	51.6	11.5	3.3	86.9(106)
	どちらともいえない	0.8	7.4	0.0	0.0	8.2 (10)
	受けなかった	0.8	3.3	0.8	0.0	4.9 (6)
	計	22.1	62.3	12.3	3.3	100(122)
ものの考え方や 判断力	受 け た	17.2	36.1	8.2	2.5	63.9 (78)
	どちらともいえない	3.3	22.1	3.3	0.8	29.5 (36)
	受けなかった	1.6	4.1	0.8	3.3	6.6 (8)
	計	22.1	62.3	12.3	3.3	100(122)
社会の問題に ついての 理解力や関心	受 け た	13.1	32.0	6.6	2.5	54.1 (66)
	どちらともいえない	6.6	22.9	4.1	0.8	34.4 (42)
	受けなかった	2.5	7.4	1.6	0.0	11.5 (14)
	計	22.1	62.3	12.3	3.3	100(122)

表8-4 仕事についても夫より早く帰宅するのが好ましい

% (人)

影響	考え方	肯定的群	否定的群	考えたことがない	不明・無回答	合 計
専門知識・技術	受 け た	40.9	36.1	7.4	2.5	86.9(106)
	どちらともいえない	5.7	2.5	0.0	0.0	8.2 (10)
	受けなかった	1.6	2.5	0.8	0.0	4.9 (6)
	計	48.2	41.1	8.2	2.5	100(122)
ものの考え方や 判断力	受 け た	26.2	30.3	4.9	2.5	63.9 (78)
	どちらともいえない	16.4	10.6	2.5	0.0	29.5 (36)
	受けなかった	5.7	0.0	0.8	0.0	6.6 (8)
	計	48.2	41.1	8.2	2.5	100(122)
社会の問題に ついての 理解力や関心	受 け た	18.8	28.7	4.9	1.6	54.1 (66)
	どちらともいえない	20.5	10.6	2.5	0.8	34.4 (42)
	受けなかった	9.0	1.6	0.8	0.0	11.5 (14)
	計	48.4	41.0	8.2	2.5	100(122)

表8-5 女性も経済的に自立すべきである

% (人)

影響	考え方	肯定的群	否定的群	考えたことがない	不明・無回答	合 計
専門知識・技術	受 け た	66.4	14.7	3.3	2.5	86.9(106)
	どちらともいえない	6.6	1.6	0.0	0.0	8.2 (10)
	受けなかった	3.3	1.6	0.0	0.0	4.9 (6)
	計	76.2	18.0	3.3	2.5	100(122)
ものの考え方や 判断力	受 け た	48.3	9.8	3.3	2.5	63.9 (78)
	どちらともいえない	21.3	8.2	0.0	0.0	29.5 (36)
	受けなかった	6.6	0.0	0.0	0.0	6.6 (8)
	計	76.2	18.0	3.3	2.5	100(122)
社会の問題に ついての 理解力や関心	受 け た	37.7	11.5	3.3	1.6	54.1 (66)
	どちらともいえない	11.4	5.7	0.0	0.8	34.4 (42)
	受けなかった	7.4	0.8	0.0	0.0	11.5 (14)
	計	76.2	18.0	3.3	2.5	100(122)

かし、一方では専門職といっても、女性が多く占めている職種についていることから男女での能力差を感じることなく業務に携わっていることも否定できないのではなかろうか。

②仕事と昇進 (表8-2)

「ものの考え方や判断力」「社会の問題」で「肯定的群」は、「専門的知識・技術」よりも「昇進」に対しては消極的な数値と見ることができる。しかし「専門的知識・技術」で「影響を受けた」ものでも「考えたことがない」ものも6.6%いることも留意する数値と考えられる。

③管理職や責任の重い仕事 (表8-3)

「専門的知識・技術」について、「影響を受けた」ものは、管理職や責任の重い仕事の魅力は否定的に感じているものが、「ものの考え方や判断力」「社会の問題」で「影響を受けた」ものより多い。その要因の一つは、仕事はするが、「管理職や責任の重い仕事」は自分の能力や経験から「したくない」「できない」と考えている点にあるのではないかとみることである。他の一つは、仕事をしていくには、管理職等に就くと現場での直接的な仕事ができなくなり、本来、自分が選択した仕事内容ではない、また総合的な仕事の大変さを知っていることから「したくない」と

考えることである。また「ものの考え方や判断力」「社会の問題」での影響の強弱で見た場合には、「どちらともいえない」と回答しているものも、管理職等に就くことには否定的に考えている。その理由は不明だが、就くことには積極性はないと見てよいであろう。

「仕事と女性」という観点から、職業観をまとめると、卒業生は仕事をする上では男女の能力差は無いと考える。一方、仕事をする上で責任ある立場、あるいは管理職になっていくことには消極的または否定的な考えを持っているといえる。

④仕事と家庭（表8-4）

女性の社会進出が進み、資格を有し、専門的職種に従事するものが多くなってきているが、結婚し共働きをするようになった場合には、働き方では「専門的知識・技術」について「影響を受けた」ものは40.9%、「ものの考え方や判断力」について「影響を受けた」ものは26.2%、「社会の問題」について「影響を受けた」ものは18.8%が「夫より早く帰宅するのが好ましい」としている。しかし「ものの考え方や判断力」「社会の問題」について「影響を受けた」ものは「夫より早く帰宅するのが好ましい」と考えていないものの割合が、考えているものより多く、特に「社会の問題」について「影響を受けた」ものは10.0%も多い。

多様な働き方が認められるようになってきた今日ではあるが、「夫より早く帰宅する」ことを好ましいとして、働き方を規制してしまう考えがあるように見られる。

⑤女性と経済的自立（表8-5）

経済的な自立について肯定的に考えているものは、「専門的知識・技術」について「影響を受けた」ものは66.4%が「ものの考え方や判断力」について「影響を受けた」ものは48.3%、「社会の問題」について「影響を受けた」ものは37.7%に達する。だが仕事しても昇進には消極的であり、また夫より早く

帰宅することが好ましいとしていることを関連付けると、経済的自立をどのようにして達成するかの見極めが裏付けられるほどの肯定とは言い難いのではないだろうか。

以上をまとめると、日本における労働、とりわけ「日本型企业社会」というパラダイムで理解されてきた日本の資本主義から、これまで長い間、女性は排除されてきた。そして女性は結婚したらその家の嫁とし、妻は家の中で分をわきまえる「良妻賢母」として、慣習的に形成され固定化された役割体系として、家事・育児を女性の領域とする「イエ」における支配と保護のタテ構造の基本原理となってきた。

ところが今日では、家族のあり方は変化してきた。それは、家族もそれまでのタテ支配の関係から、平等な人権を持つ男性と女性から構成する民主的家族となり、夫婦と子どもからなる「核家族」となった。

「男女雇用機会均等法」が発足して10年余りを経た現在、なお女性の就業率は、年齢階級別にM字型曲線を描いている。すでに先進諸国の多くがM字型から、台座型に、また中絶から継続へと変化を進めているのに対し、日本においては今なお根強い性別役割分業意識と、それを利用した雇用管理が残っているといえる。それは、経営組織上の下位職務にほぼ平行移動できるような「女に適した仕事」があるということへの正当化と、世帯の主要な稼ぎ手は男性であり、女性は補助的な稼ぎ手になら「なってもよい」という、あくまでも家事・育児の専担者であるべきであるという通念からもたらされるものである。こうした社会通念が、今回の調査においても、仕事はするが、昇進、管理職には消極的で、結婚したら夫より早く帰宅するのが好ましいと考えることになるのであろう。そこで、女性労働者の労働環境における不備を是正すべく、女性労働者の労働権と母性・家庭生活の両立を図ることが求められる傾向が、徐々にでは

あるが認められるようになってきている。

特に、本学卒業生の多くは、いわゆる専門職について、仕事を継続しようと考えているので、今後以下の事項について在学中にも意識付けをしていくことも必要と思われる。

①女性が働き続けやすい職場、男女混合職場の制度と雰囲気を作ること。

②性別職務分離の下にあっても女性賃金の著しい低落を防ぎうる、同一価値労働同一賃金という枢要の実践の必要性。

③非正社員の安易な活用、待遇を容易に受け入れないで再考する。

④女性のみが仕事と家事・育児・介護を両立できるようにしようとするのではなく、男女ともに両立できるような意識と社会作り等である。また、「均等法」に「女性労働者は、労働に従事するものとしての自覚の下に、自ら進んで、その能力の開発及び向上を図り、これを職業生活において発揮するように努めなければならない」と規定されているように、女性自身も意識改革を一層推進していかなければならない。

せっかく取得した資格や知識、技術を十分活かし、職業人として、また家庭人として、自立した個人の、主体的自覚的な男女共同参画社会の実現を、在学中から心掛けるよう、就職活動時のみならず、折に触れて気づきを促せるようにしていくことが必要ではなかろうか。

3) 本学での教育や進路指導の展望

本学に対しての教育・進路指導に関する要望はカリキュラム、実習、進路指導、卒後教育があげられた。

①カリキュラム等

免許・資格の増加によるカリキュラムの複雑化と時間割の過密が問題点としてあげられる（主に家政学科）。免許資格を取ることの認識が深まらないまま、日々の忙しさに流されてしまう学生の姿が見受けられる。卒業後

の進路と結びつけ、自分に必要な資格なり授業なりを選択するよう指導していく必要がある。また、限られたカリキュラムのなかで学外の催し（公演会、研修会等）への参加を促していくことも効果的である。いずれにしても免許資格への意識を高め目標を明確にし、学びたいという自発的な要求を引き出すための働きかけが重要となる。さらに、授業間の連携による効率の良いカリキュラムづくりも進めていくことが求められる。

実践力に関しては、重点的な課題として、これまでカリキュラムにも検討が重ねられてきたが、職場環境が厳しくなるなか即戦力が求められる時代であることから、それと併せ今後は、就職先で求められる知識や技術を、それぞれの現場で学び取っていく力をいかに養うかがカギになると思われる。

②実習

学科、専攻、コースにより実習内容が多様なため一概にはいえないが、目的意識が曖昧なまま実習に臨む傾向は否めない。免許資格に対する姿勢のあり方がここでも問われてくる。学生への事前指導の充実はもちろんだが、実習先との連携、特に実習の目的や当該の職業に対する考え方等の点で意思統一を図ることが重要だと思われる。

③進路指導

アドバイザーは、入学当初から学生との間に相談できる関係をつくることに努力しており、進路指導に関しては学生部との連携で、一人ひとりにできるだけきめ細かく対応するように心がけている。しかし、50人を超えるクラスもあり、一人のアドバイザーがすべての学生に働きかけ彼女たちの悩みや不安を把握するというのは至難の業である。ますます困難になる就職活動を支えるには、アドバイザー以外の教員の関わり方を検討することが求められる。

④卒後教育

卒業後、社会に出ると「もっと勉強してお

けばよかった」と誰しもが思うことである。漠然と受身の姿勢で学んでいた学生時代と異なり、自分に必要な知識や技術が具体化され明確になるため“これを学びたい”という要求に真剣さが増す。しかし、いったん社会に出てからのこうした思いの受け皿を用意するのは簡単ではない。具体的であればあるほど要求は多様化するであろうし、働きながらでは自由に使える時間も非常に限られてくる。

質問紙法による回答には通信教育に対する要望等も挙げられていたが、その他の方法も含め今後の検討が必要と考える。食物栄養専攻で6年前から実施している管理栄養士国家試験対策講座は、卒業生や地元で栄養士として働く方々を中心に定着してきている。卒業生以外も対象としており、県内各地、ときには県外からの参加者も多く、卒後教育としての一つの成功例と言える。

6. 結 び

平成14年度 本学の自己点検委員会は、短期大学基準協会の「認証評価機関としての評価に関する基本的観点」「評価基準及び評価方法のイメージ」の提示にもとづき、その「評価の視点」で点検・評価（3段階）を実施した。この結果を受けて進路委員会は、本学での学生生活が卒業後の自己実現への目標に、また、本学での「美しく生きる」教育の精神がどのように生かされているかを質問紙法により「飯田女子短期大学卒業生意識調査」として実施した。対象は平成10～12年度卒業生736名である。前述の「評価視点」に関する項目については「飯田女子短期大学白書－その現状と課題2004－」に一学生の卒後評価への取り組み－として報告した。今回はその調査結果を「短大教育と職業観」の視点から分析を行なったものである。

1. 本学の教育はどのように受けとめられているのだろうか。本学を卒業して「よかった」とするものは87.7%と高い。その第一

の理由に「資格や単位が得られたこと」29.0%、「広義の教養・知識の会得」24.3%、「人との出会いと経験」21.5%をあげている。

入学者の目的の多くが、憧れの職業に就くために、また免許・資格を取得すれば将来は明るいと考え、卒業後への夢を描き入学してくる。しかし、本学卒業のよかった理由には「就職に有利だった」という回答は0.9%と低い数値であった。

2. 学生生活の振り返りで「非常に有意義であった」ことは、「学内での友だちとの交わり」57.0%、「教師との個人的接触」31.7%、「講義・授業」26.2%があげられた。「宗教教育」についてはわずか4.7%であった。

このことは、日常の授業、教師との個人的接触、友達との出会いは楽しい時間として学びにより学習の時間であったように思える。しかし、本学の教育のねらいを具現化したA・Hは理解されることなく卒業していくものが多いといえる。

3. 現在の生活に影響を受けたものとして、「専門的知識・技術」「ものの考え方や判断力」「社会問題への関心」の影響は、「講義・授業」「学内での友だちとの交わり」において「有意義だった」と90%前後が回答した。
4. 進路別にみた短大教育・生活の影響は、進学・専門職者については、「非常に有意義だった」とする数値が24.3～36.0%であるのに対して、一般職者は5.9%だった。このことは、専門職・進学者への指導は充実しているが、一般企業への就職指導はあまり充実していないのではないか。一般職者への指導体制を検討する必要がある。また、宗教教育は進路別にみても「有意義でなかった」の数値が高い。本学の教育の場として再構築していかなければならない。
5. 転職への思いの有無では、「現在の職業

を続けたい」68.8%、「現在の仕事を変えたい、やめたい」ものが16.4%いる。労働省調査での短大生の離職率との比較では大変少ないといえる。

6. 「女性と職業」に対する考えの第1は、「子どもができたなら職業をやめ、手がかからなくなったらまた職業をもつ」とするものが45.1%、結婚・出産・子育てに関係なく、ずっと職業をもつ」ことを望んでいるものは約32.8%である。このことを学科別に見ると、食物栄養専攻・社会福祉コースでは前者が高く、生活デザインコースを除く他のクラスは両者間に大きな違いはみられない。この2つの職業意識は短大教育の影響との関係でみると「専門的知識・技術の影響を非常に受けた、いくらか受けた」とするものが最も多く、「ものの考え方判断力の影響」については、「非常に受けた」とするものより「いくらか受けた」「どちらともいえない」とするものに多く見られていく。

7. 短大教育・生活の影響の有無については、「専門的知識・技術」では「非常に受けた」とするもの49.2%、「ものの考え方」では「いくらか受けた」とするもの46.7%、「社会の問題についての理解や関心」では「いくらか受けた」とするもの43.5%であった。

8. 職業についての考え方

- ①女性と男性の能力差：差がないと考えるものが72.0%。
- ②仕事と昇進：「ものの考え方や判断力」「社会の問題」で否定的群は「専門的知識・技術」より消極的。
- ③管理職や責任の重い仕事：「専門的知識・技術」に影響を受けたものは「ものの考え方や判断力」「社会の問題」に影響を受けたものより否定的に感じている。
- ④仕事と家庭：女性の仕事の選択肢は広くなった今日ではあるが「夫より早く帰宅する」ことを好ましいと考えるものは多い。

⑤女性と経済的自立：働くことによる女性の経済的自立を肯定的に考えているものは、「専門的知識・技術」に影響を受けたとするもの66.0%、「ものの考え方」に影響を受けたもの48.0%、「社会の問題」に影響を受けたもの38.0%であった。

女性の社会進出は当たり前として考える人が多くなった現在であるが、今回の調査においても、仕事はするが、昇進、管理職には消極的で、結婚したら夫より早く帰宅するのが好ましいと考える日本独自の慣習的な女性の労働意識が学生にも高いことを知る。今日では女性労働者の労働権と母性・家庭生活の両立を図る制度も整備されてきている。まだその運用には企業差がみられるだろうが、本学の多くの学生が専門職に就き、仕事を継続していくためには、主婦業を選択するにしても「仕事をする」ということを、短大教育の場でしっかり考えてみることも必要なことではないだろうか。

9. 今後の教育・進路指導の展望

在学時の振り返りで意見がよせられた内容は4点に集約できる。

- ①カリキュラム：カリキュラムの複雑さ、時間割の過密さは、日々の忙しさに流されやすい。そのためには授業選択の指導、学習意欲を高める働きかけ、就職先で求められる知識や技術の獲得が必要。
- ②学外・臨地実習：目的意識の希薄さ、免許・資格に対する姿勢のあり方、実習先との連携の検討。
- ③進路指導：アドバイザー以外の教員の関わり方の検討。
- ④卒後教育：在学時は漠然と受身の姿勢で学んでいたが、卒後は必要な知識や技術が具体化されることから、働きながら学べる環境設置を期待する。

本調査で感じたことは、免許・資格を取得したことを就職に直結した考えと、いつまでも狭義の専門職にこだわる実状に、改めて卒

学生の思いの深さを知った。そして、専門職に限らず、どんな時代においても免許・資格は専門職への登竜門であることを謙虚に受け止め、どんな仕事にも「いい仕事をしたい」きちんとした意識を持ってほしいと考える。厚生労働省職業安定局発刊の新規大学等卒業者の就職状況調査では、在職期間別離職率推移についてみると、平成10年の卒業生は、3年目になると就職時の39.0%が離職している（1年目離職率16.3%，2年目離職率11.6%，3年目11.1%）ことが報告されている。平成11年では41.0%（17.3%，12.8%，10.9%），平成12年では42.9%（19.3%，12.9%10.7%）と今日の短大生離職状況は大学生より高いことを知る。

短大教育として「働く意識」「日本の労働に関する制度」「女性と仕事」「専門職への広い認識」についての将来を見据えた教育の実施は、これまで以上に学生の自立が期待され

るのではないかと考える。

最後に、本調査にご協力を頂いた多くの卒業生の皆様に深く感謝を申し上げます。

参考文献

- 1) 卒業生調査報告 1991年 青山学院短期大学 1993. 3
- 2) 飯田女子短期大学白書 ―その現状と課題2004― 飯田女子短期大学2004. 5
- 3) 新規大学等卒業就業者の就職離職状況調査 厚生労働省職業安定局 2005. 2
- 4) 働き続ける女性たち ―新しい企業と女性のためのジェンダー・フリー読本― 財団法人 東京女性財団 1999. 3
- 5) 女性労働と企業社会 熊沢誠著 岩波書店 2000. 10
- 6) 日本社会とジェンダー 三宅義子編 明石書店 2001. 12

飯田女子短期大学卒業生意識調査 (2003年)

飯田女子短期大学 学生部 進路委員会

記入上の注意

1. 特に指示のないかぎり、該当する番号に1つだけ○をつけて下さい。
2. 回答者が指定されている質問には、該当する方だけがお答え下さい。
3. 記入欄の設け方ある質問はそこに書き込んで下さい。
4. 「その他」に○をつけた方は具体的に内容もご記入下さい。

調査結果は統計的に処理致します。あなたのお名前が出たりご迷惑をおかけいたしますことは決してございませんので率直にお答え下さい。

回答は同封の送信用封筒をご利用のうえ、1月30日(金曜日)までにご投函下さい。

あなたが本学を卒業したのはいつ、どの学科ですか。○をしてください。

卒業年度：	平成 10 年.	11 年.	12 年
学 科：	1. 家政学科	家政専攻	生活デザインコース
	2. 家政学科	家政専攻	保健養護コース (健康生活コース)
	3. 家政学科	生活福祉専攻	
	4. 家政学科	食物栄養専攻	
	5. 幼児教育学科	幼児教育コース	
	6. 幼児教育学科	福祉心理コース (社会福祉コース)	
	7. 看護学科		

Q1 あなたは本学を卒業したことについてどのように思いますか。

次のうち、あてはまるところに1つだけ○印をつけて下さい。

1. 非常によかったと思う
2. よかったと思う
3. どちらともいえない
4. あまりよくなかったと思う
5. よくなかったと思う

SQ1-1 その主な理由はどうなことです。該当するものを1つ選んで○をつけて下さい。

1. 専門的技術が身についたこと
2. 社会的に認められた資格や単位が得られたこと
3. 広い意味での教養・知識が身についたこと
4. 大学生活でいろいろな人に交わり、経験を広めたこと
5. 就職に有利だったこと
6. 専門的技術が身につかなかったこと

7. 社会的に認められた資格や単位が得られなかったこと
8. 教養や知識が十分身につかなかったこと
9. いろいろな人と交われなかったこと
10. 就職にあまり有利でなかったこと
11. その他 ()

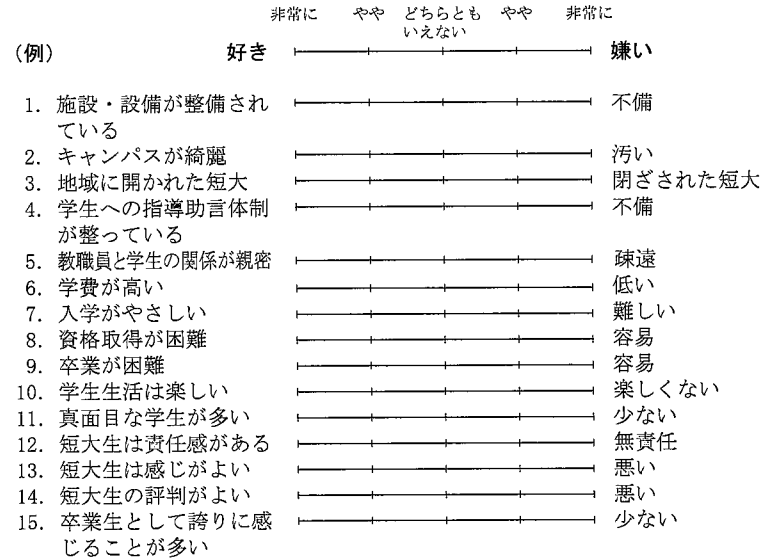
Q2 本学で過ごした学生生活を振り返り、次の事柄についてどのように思いますか。各項目について最も近いと思われるものを1つ選んで○をつけて下さい。項目5～7については、該当者のみお答え下さい。

	非常に 有意義 だった	いくらか 有意義 だった	どちらとも いえない	あまり 有意義で なかった	有意義で なかった
1. 講義・授業	1	2	3	4	5
2. 宗教教育 (A・H, 行事)	1	2	3	4	5
3. 教師との個人的接触	1	2	3	4	5
4. 学内での友だちとの交わり	1	2	3	4	5
5. クラブ活動	1	2	3	4	5
6. 寮生活	1	2	3	4	5
7. アパート生活	1	2	3	4	5

Q3 本学で受けた教育や学生生活の影響についてお伺いいたします。あなたは次の3つの項目についてどのくらい影響を受けたと思いますか。

	非常に 受けた	いくらか 受けた	どちらとも いえない	あまり受け なかった	ほとんど受け なかった
A. 専門的知識・技術	1	2	3	4	5
B. ものの考え方や判断力	1	2	3	4	5
C. 社会の問題について の理解力や関心	1	2	3	4	5

Q4 あなたは本学についてどのようなイメージをおもちでしょうか。
現在のイメージをお答え下さい。
「やや好き」というイメージであれば例のようになります。
例にならって各ものさしの該当するところに○印をつけて下さい。



Q5 2年間の短大生活で、今なお印象に残っていることがあればお書き下さい。

Q6 授業に対して、もっと学んでおいた方がよかったと思われることがありましたらお書き下さい。

Q7 在学生へのアドバイスがありましたら、自由にお書き下さい。

Q8 本学に対して要望したいことがあれば、自由にお書き下さい。

Q9 あなたの本学卒業時の進路は次のうちどれでしたか。

1. 就職 (職種:)
2. 専攻科進学
3. 4年制大学進学 (編入を含む)
4. 専門学校進学
5. 家居
6. その他 ()

Q10 あなたの現在の職業を教えてください。

1. 職種及び勤務先 ()
2. 家居 (主婦・無職)
3. その他 ()

Q11 あなたは卒業後、転職されましたか。

1. はい (理由:)
2. いいえ (理由:)

Q12 あなたは今後の職業についてどのように考えていますか。

1. 現在の仕事を続けたい
2. 現在の仕事を変えたい
3. 現在の仕事をやめたい
4. 現在職業をもっていないし、職業につきたいとは思わない
5. 現在職業をもっていないが、職業につきたい

Q13 本学卒業後、さらに教育を受けたことがありますか。

1. ある 2. ない

SQ13-1 「ある」と答えた方にお聞きます。卒業後、あなたが大学、専攻科、専門学校、通信教育等を受けた動機は何だったのですか。

1. 今までの専攻分野について、さらに勉強したかった
2. 別の分野について勉強したかった
3. 短期大学の2・3年間では不十分だった
4. 4年生の大学を卒業したかった
5. 資格取得のため
6. 現在の仕事に必要なだった
7. 将来の仕事に必要なと思った
8. 技術を身につけたかった
9. 教養を身につけたかった
10. 暇な時間を有効に使いたかった
11. その他 ()

SQ13-2 教育を受けた結果はどうでしたか。該当する項目を選んでください。(複数可)

1. 今までの知識をさらに掘り下げることができ満足している
2. 新しい分野の勉強ができて満足している
3. 仕事の上で役立った
4. 高学歴になり、色々な意味で有利になった
5. 資格を取得した
6. それほどの満足感はない
7. その他 ()

Q14 あなたが持つておられる資格について教えてください。養護教諭2種免許、保育士資格、ホームヘルパー2級、茶道師範など、全ての資格について記入下さい。

本学入学前	
本学在学中	
本学卒業後	

SQ14-1 将来取得したい資格があれば記入して下さい。

--

Q15 あなたは本学卒業後、就職活動(フルタイム、パートタイム、自営、その他を含めて)を行ったことがありますか。

1. ある 2. ない

SQ15-1 「ある」と答えた方に。あなたは職場で、短大卒ということで、大学卒の女性に比べて、不利だと感じたことがありますか。

1. ある 2. ない

SQ15-2 「ある」と答えた人に。それはどんなことですか。具体的に記入してください。

--

Q16 「女性と職業」について次のような考えがあります。あなたの考えはどれが一番近いですか。

1. 結婚するまでは職業をもつ
2. 子どもができるまでは職業をもつ
3. 子どもができたら職業をやめ、手がかからなくなったら職業をもつ
4. 結婚・出産・子育てなどに関係なく、ずっと職業をもつ
5. 女性は職業をもつ必要はない
6. わからない

ご協力ありがとうございました.